

9月16日(土曜日) 特別講演

‘W.B. Yeats and the Irish Revival’

Dr PJ Mathews
University College Dublin

W.B. Yeats firmly believed that the redirection of energies away from the disillusionment of post-Parnell parliamentary politics into cultural endeavour provided the momentum for the Irish literary revival—and many historians have followed his analysis. Roy Foster, however, has challenged this view and dismissed it as a retrospective “poetic” misreading. Literary activity, he contends, did not take over politics, in fact by 1900 “constitutional politics could be seen to be working”. Yet Foster’s revision still insists on a clear distinction between the lofty idealism of a literary movement and the practical concerns of politics, which are judged to operate in distinct realms. Surely though, what is most striking about this period of Irish history is not that literary activity *replaced* politics as Yeats implied (or, conversely, that political endeavour was more effective than literary work, as Foster argues), but that much of the literary activity of the revival was *accompanied* by a great deal of innovative political work—outside the purview of the main constitutional parties, and within the domain of what I would like to term, the newly emerging self-help movements. Among these self-help movements we can include: the Abbey Theatre, Sinn Féin, the Gaelic League and the Co-operative Movement.

If there is a tension within Irish nationalism at this time, it may be more useful to see it as a battle between a new self-help consensus and old-style parliamentary politics, rather than a struggle between “cultural” and “political” forces. This paper will consider the role of W.B. Yeats as a leading figure in the Irish Revival. It will address his connections with the self-help movements mentioned above and will provide an analysis of a selection of his drama and poetry in relation to this topic.

9月16日(土曜日) 研究発表

断片的な英雄：イエイツによるケイスメント像

中村 麻衣子

現実のアイランド独立運動からは距離をとっていたイエイツであるが、その作品の中には独立史の英雄と見なされる人物が多く登場している。そして作品によって発表される媒体も様々なことから、読者によるある種の読みを意図して創作、発信されていることも多いといえよう。

本発表ではその中でもロジャー・ケイスメントについての詩を論じる。実生活は知己ではなかった両者であるが、その詩の影響力はエヴァ・ゴア＝ブースをはじめとする、実際にケイスメントと交流のあった作家の作品にも見出すことが出来る。さらにリチャード・マーフィーの「ケイスメントの葬儀」はそのタイトルや扱う人物の歴史化において、イエイツの「パーネルの葬儀」を連想させる。

処刑直後から現代まで続く『黒い日記』に関する論争でのケイスメント像形成の根底に、イエイツを置くことができるだろう。様々に量産されたケイスメントに関する言説において、その人物像はイエイツの詩に回帰することが可能なのである。本発表では主にケイスメントに関するふたつの詩「ロジャー・ケイスメント」「ロジャー・ケイスメントの亡霊」を中心に、発表媒体による読みの違い、影響力と共に、ケイスメント像の形成過程においてイエイツの詩が示す役割について考察する。

戦争詩人としてのイエイツ―「1919年」を中心に

内田 有紀

イエイツが戦争詩を書くことへの拒絶を表明したことや、『オックスフォード現代詞華集』の序文のなかで戦争詩人たちを批判したことは広く知られている。しかしながら、こういった彼の言動には額面通りに受け取れないものがある。彼が第一次世界大戦によって危機に直面し、伝統的な価値観が崩壊してゆくヨーロッパ世界に深い関心を抱いていたことは間違いないし、その余波を受けたアイランドの状況についてたびたび言及していることは確かである。直接的な戦争参加体験を持っていなくとも、結局のところ、イエイツも戦争によって変化させられた詩人であると考えることができる。本発表では、「1919年」といった詩作品を中心に、イエイツの広義の戦争詩と捉えることのできる作品を取り上げて、彼がヨーロッパの、そしてアイランドの戦乱をどう描き出しているかという点について検証する。ならびに、戦争詩人たちとのスタイル上の共通点や、彼の戦争詩批判の戦略性についても考察する。

死滅から再生へーBeckett 演劇の女たち

谷上 れい子

この研究発表において、ポスト・モダニストの劇作家 Samuel Beckett (1906-89)の不条理演劇に焦点を当て、現代の混沌や存在の不条理性に挑むその革新的な創作過程を考察する。それによって、彼の演劇には、崩壊や枯渇や死の象徴である「墓・死」(Tomb)と化した不毛世界から、豊穡や再生の象徴であるグレート・マザー的「子宮・再生」(Womb)へと変容していく漸進的過程が潜んでいることを証明する。

Beckett 演劇は、生きる支柱(意味と目的)を喪失し、夢も希望もない不毛の荒地へ投げ出された人間の悲喜劇の世界である。人間は異邦人、放浪者と化し、<時間>という無限地獄の囚われ人である。Beckett は空間と時間と人間存在の本質的理由を問うが故に、「今、ここに、存在すること自体」を拷問と感じ、コトバや人間存在そのものの無意味性、表象不可能性、不確実性、饒舌と沈黙と葛藤し続けている。すべてのものがゆっくりと崩壊・落下し続け、コトバも肉体も精神も無残にも引き千切られ、もはや断片しか残らない。裸の舞台上で、登場人物たちは滑稽な演技を繰り返しながら、平安をもたらすはずの終点に限りなく近づこうとする。しかし、その終点に決して到達することはない。骸骨のように干からびた亡霊のような女たちは、虚無の不条理世界で自己のアイデンティティーを求めて、頭蓋骨の絶望的な声なき声で叫びながら、必死に生の本質に迫っていく。

これらの亡霊たちを支えるのは、“Less is more”の精神と Erich Neumann が唱える Great Mother (崩壊と再生の女神)である。Beckett は「最大の崩壊と最小の発生は一致し、原理的に、崩壊はすなわち発生である」と結論づけ、贅肉を削ぎ落とす Minimalism 手法で舞台を混沌から死滅、そして再生へと転換させる。Beckett 世界は、死と崩壊に至る父なる神 (God) の世界から、再生と豊穡を約束する「グレート・マザー」(Goddess)の世界へと転換する。Beckett 演劇の主人公たちが待っている Godot は父なる God ではなく、母なる Goddess である。

The Dreaming of the Bones にみる祖国愛と恋愛の問題

薦田 嘉人

イースター蜂起に加わった青年の一人が敵の手を逃れ、荒地をさまよっていると、そこに見慣れぬ衣装を身にまとった男女が現れる。この男女こそ、700年前に祖国を売り渡した恋人たち、ディアミッドとダヴォーギラである。祖国を売り渡したという罪の意識にかられて、二人は死後の今もなお後悔と苦悶のうちに夢見回想ドリーミング・バックを繰り返している。彼らは自分たちと同じ民族の誰か一人が「赦す」と言ってくれるなら、罪をわずかに償うことができる、と言うが、青年は遂に「赦す」とは言わない。

蜂起から3年後の1919年に書かれた戯曲、『骨の夢』（初演1931）において、イェイツは愛国心に燃え、祖国に身を捧げようとした青年と、逆に祖国を裏切ってまでも、愛を貫こうとした男女とを描いている。そして、青年と男女との対話を通じて、〈祖国への愛〉と〈男女の愛〉の違いを浮き彫りにしている。しかし、青年の抱く〈祖国への愛〉が、仮に支配・被支配という政治的な権力関係に基づいたものでしかないならば、青年は、なぜ男女の恋愛関係に心を動かされるのだろうか。彼は、なぜ祖国を裏切った恋人どうしを赦してしまいそうになるのだろうか。青年の心の変化をたどりながら、祖国愛と恋愛の問題について一考察を試みたい。

9月16日(土曜日) ワークショップ

再び、『煉獄』をめぐって

谷川 冬二

ワークショップのタイトルに「再び」が付くのは、二十年前、同じ日本イェイツ協会、故出淵博氏司会で『煉獄』をめぐりシンポジウムが開かれたからである。シンポジウムとワークショップ、後者のほうがフロアへの開放度が高いかと考えるが、何らかの視点やアプローチの方法を提示するという点は変わらない。前回のも含めてこれまでの論考を整理しながら、屋上屋を架すことがないよう留意して、なるべく多様な読み方が模索できれば良いと望んでいる。

このため、講師の諸氏に勝手ながらこんなことをお願いした。岩田氏には、『煉獄』発表当時の状況を視野に入れ、その意義を評価する。佐藤氏には、劇作家イェイツの遺産を後のアイルランド作家たち、とりわけ北の詩人たちがどのように批判的に継承したか、を鳥瞰する。また、松田氏には、時代を背景にしたのとは異なる読み方をご提供いただければありがたい、と。

私の願いを踏まえて、さらに各氏が独自の視点を加えられたのが、以下の梗概である。とはいえ、あくまで6月末日時点でのもの、さらにお互いに議論を進めて秋の日のとある屋下がり豊かな時間となるよう努めたい。

『煉獄』における〈詩〉と〈主題〉の形成過程について

岩田 美喜

『煉獄』は、1938年8月10日に初演された直後から、様々な論議を呼んだ作品であ

るが、これらの議論はごくごく大まかにいえば次のように集約できる。即ち、中後期以降の夢幻能を取り入れたイェイツ詩劇の頂点としてその審美的価値を高く評価するものと、政治劇としての『煉獄』が持つ純血主義的なイデオロギーを批判するものである。発表当時の状況をふまえて『煉獄』を解釈する鍵は、作品の「審美性」と「政治性」にあるといえるだろう。

こうした作品の多層性は、イェイツの作劇の経緯にもよく現れている。よく知られた一節を用いれば、『煉獄』は彼が抱いていた「悲劇的な強い緊張感」を持ったヴィジョンが元になっているが、イェイツはこれを一個の作品にするために、かなりの再考と修正を行って来ているからである。彼自身が「シナリオ」と呼んだ散文による草稿が、韻文による詩劇へと変容してゆく経緯は、一つには、彼の審美的な推敲をよく示してくれている。しかし、イェイツが草稿をどう改訂したかということは、彼が、作品の持つ政治的な主題をどのように構築していったかをも、同時に示している。例えば、『煉獄』におけるキー概念である「違犯／罪 (transgression)」という単語は、散文のシナリオでは一度しか登場せず、しかも（おそらくは韻文で書き直す作業に移る直前に）シナリオを修正する段階になって初めて書き込まれたものである。その一方で、草稿段階の老人は、完成作品における独善的な自己正当化の理論をまだ獲得しておらず、自分と息子のことを「二人の邪悪なけだもの (two evil brutes)」と一緒にして呼んでおり、おのれ自身をも邪悪な存在として認めている。

本発表では、同時代の批評にも注意を払いつつ、こうした草稿を用いながら『煉獄』のテキストを読み直し、イェイツが自らの言説を形成してゆく過程を検証することで、発表時に『煉獄』という作品が有していた意味を多角的に探してみたい。

『煉獄』の現代性——北アイルランドの視点から

佐藤 亨

『煉獄』の老人は、比喩的に言えば、離婚から生じるジレンマを抱えている。彼の血には貴族性と民衆性、プロテスタント性とカトリック性、あるいは、英国性とアイルランド性など、相反する二つの要素が混じりあい、これら二つの力の相克に彼は苦しんでいる。

この異なる二者を調和する方法として、イェイツ (1865-1939) ほか、アングロ・アイリッシュないしはアセンダンシーの系列に連なるアイルランドのプロテスタント作家たちは文化的ナショナリズムを推進した。ケルト的アイルランドというアイデンティティの発見、あるいは宗派を越えた文化的統一という夢に向かった彼らは、しかし、現実世界において幻滅を味わう。ビッグ・ハウスの焼き討ちとか、民衆が現実世界に対処すべくアイルランド語を捨て英語に向かったことなどは、彼らの掲げた理想を内側から崩すものだったろう。

イェイツはプロテスタントという出自ながら、アイルランドに根づきアイルランド人としての自覚を持とうとした。彼に見られる英国・アイルランドという二重性、そしてそこから生じるジレンマは、さかのぼれば、サミュエル・ファーガソン (1810-86) など

にもうかがわれる。そして、立場や形が違おうにしても、現代の詩人、とりわけ、北アイルランドの現代詩人たちによって批判的に継承されている。

というのも、北アイルランド自体、「雑婚」（英国とアイルランド間の宗主国・植民地関係）の結果生まれた国家であるからであり、そのツケは紛争や対立という形でいまだにかの地でくすぶっているからである。このようにイエイツが『煉獄』で造形した老人の存在は北アイルランドにおいて意味を放ちつづけている。

発表では、「雑婚」という詩を書いているポール・マルドゥーン（1951-）、あるいは、シェイマス・ヒーニー（1939-）、シェイマス・ディーン（1940-）、トム・ポーリン（1949-）などの作品や発言を踏まえ、『煉獄』という詩劇が持つ現代性について考えたい。

『煉獄』をどう読むか

松田 誠思

『煉獄』をどう読むか—そのためには考慮すべき前提条件があり、何に向かって読むか、「読み」の主眼をどこに置くかという問題もあるが、ここでは特に前者に関していくつかの問題点を指摘しておきたい。それによって後者についても、自ずと方向づけが示されるであろう。

最晩年のYeatsは、自他ともに許す「大詩人」の榮譽に満足して余生を過ごすこともできたであろうが、あえてそうはしなかった。また公表すれば市民的常識を疑われるきわどい事柄、一般大衆に憎まれ、知友にさえ背かれる「反人間的」事柄を書き、公表してはばからなかった。それが自覚的に行われているからには、世間知らずの詩人の「愚行」として片づけることはできないし、政治的公正さに鈍感で頑迷な老人の時代錯誤として笑ってすますことはできない。これが第一の問題。

第二に、間近に迫る死を意識しながら、彼の関心は「性の神秘」と「死後生」の問題に集約されていったといつてよい。1930年代のすぐれた詩と劇のほとんどすべてが、二つの問題を相関的に扱っており、『煉獄』と『クーフリンの死』はその典型である。従って、「死後生」を信ずる者にとって「現世」がどのように見えるかという観点から、最晩年の彼の作品を受け止める必要があり、優生学的思想とプロテスタント・アセンダンシー文化の衰微への痛憤をモチーフに含む『煉獄』の解釈において、特にこの観点の持つ意味は大きい。この劇が「詩劇」として構想された第一の理由はそこにある。

第三に、彼の信ずる「死後生」は、罪のあがないによる救済というキリスト教の他界観ではなく、死後の魂の運動に関して‘dreaming back’という現世との関係に強く支配される倫理的観念に立っている。ところが、この観念を土台にしてほとんど同時的に書かれた『煉獄』と『クーフリンの死』が、「死者の世界」「死後生」についてまったく異なるヴィジョンを提示しているのは何故かという問題。もう一つは、歴史における〈現代〉という時代の特異性を、神話的時間と出来事の枠組みの中で浮かび上がらせるのが『クーフリンの死』であるとすれば、『煉獄』は、現代の特異な出来事・社会傾向によって、歴史的時間の中で継起する〈神話的元型〉を提示しており、これら二つの作品におけるヴィジョンが、第一の問題点として指摘したイエイツ最晩年の異様な言説とどのよ

うに係わっているかを考えたい。

9月17日(日曜日) 研究発表

*Calvary*の舞台表象について

佐藤 容子

W.B. Yeats の劇作 *Calvary* は、*Four Plays for Dancers* の中に収められており、Yeats と Fenollosa-Pound 訳の能との接触が直接の契機となって生まれた作品の一つである。しかし、劇の枠組みを形作る楽師たちの歌と語り、仮面、舞踏の要素が含まれてはいるが、モチーフの点からみるならば、これまで『杜若』、『隅田川』、『三輪』を参照しつつ論じられることはあったものの、能との関連は最も薄い作品である。だが、「能」という演劇様式の要には、さまざまな古典や物語を取り込み新たな息吹を吹き込むことがあると考えるならば、*Calvary* という劇作もまたそのような特徴を備えており、そうした意味では能の精神に極めて深く接近した作品であるということもできよう。

本発表においては、Yeats が *Calvary* において、聖書物語をどのように独自に書き換え、自らの神秘哲学大系の中に位置づけながら、劇的世界を構築しているかについて論じる。Oscar Wilde の散文詩‘The Doer of Good’を踏まえつつも、*Calvary* における Yeats の Christ 磔刑の意味づけは、異端的と評されることも多くあり、この戯曲は生前に上演されることはなかった。しかし彼の創作活動全体にとって、この作品の持つ意味は重い。というのは、Yeats にとって Christ は「始原的」英雄であって、自らの最終的な理想とする「対抗的な」英雄 Cuchulain の対極をなす存在だからである。‘The Second Coming’において垣間見られた終末のヴィジョンが、*Calvary* においては、「夢見」の中で自らの反対物と邂逅する Christ の葛藤として劇化されるのである。

この過程における Yeats の詩的技巧は特筆に値しよう。それには Yeats の体系的な頭韻の使い方が重要な役割を果たしている。私は、基本的に Yeats は、「始原的」世界を‘f’音で始まる言葉によって、また「対抗的」世界を‘b’音で始まる言葉によって象徴させていると考えるが、さらに注目すべきは、これらの対立する二つの世界を表す二音に加え、その二つが衝突する領域に現れる‘d’音による頭韻の象徴性である。大きくいうなら、*Calvary* においては、‘b’音を予告的に響かせながらも、‘f’音から‘d’音に向かって楽想が展開していく。それは劇の結末における磔刑の Christ、その周りで踊る Roman Soldiers の‘the dance of the dice-throwers’に向かって結実していき、ダイナミックな舞台表象を形作るのである。

デレック・マホンの初期の詩：語られざるものへの視点

三木 菜緒美

北アイルランド出身の詩人デレック・マホン (1941-) の詩 “A Disused Shed in Co. Wexford” は、間接的に北アイルランドの状況を描いた詩である。納屋に閉じ込められ、まるで光を求めるかのように鍵穴に群がるマッシュルームの発話という腹話術的手法により、この詩ではマッシュルームが失われた人々を象徴している。

この詩に代表されるように、マホンの初期の詩は、しばしば ‘bleak’ と表現されるような寂れた風景に人間や動物以外の「もの」を描くことが多い。マホン自身はこれを ‘objects with their inherent numina’ と呼んでいるが、ブレンダン・ケネリーは、このような「もの」を詩の中心に据える手法をとるマホンについて ‘he is a poet of the perimeter, meditating on the centre, with a mixture of amusement and pain’ とコメントしている。詩の中で、マホンは自身を周辺に退かせ、中心に「もの」を据え、いつもある種の軽さを生み出しつつも、北アイルランドの歴史的、政治的状況を念頭において描いているのである。

これら、詩人の周縁的位置付け、「もの」の中心性、ユーモアのような軽さ、北アイルランドの状況に関するアレゴリーは、マホンの詩の特徴であるとともに、実は彼のアイルランド文学におけるプロテスタント詩人としての意識を強く反映したものでもある。歴史的、政治的に支配者側であったプロテスタント出身であるがゆえに、彼は詩人がもちうる権威や暴力に対して非常に敏感に反応するのである。

本発表では、マホンの初期の詩を中心に、アイルランド詩において自らの立場を模索する詩人の姿を追いながら、「語られざるものへの視点」をテーマに、このような視点がマホンのどのような意識から生じているのかを考察してみたいと思う。

9月17日(日曜日) 合同シンポジウム

イエイツとロレンスにおける国家観

反国家の思想 —ロレンスとイエイツ

羽矢 謙一

ロレンスはその最晩年に書かれた『アポカリプス』論の最終章で、国家とは真に生きた個人の存在の集団ではなく、断片的な、つまり無機的な、特に金のつながりでしか結びついていない、虚偽の集積でしかないと言う。「デモクラシー」と題する彼のエッセイでも、いかなる人間も他のいかなる人の存在を決定することはできないと断じている。それこそがロレンスの中にあつた「新しい民主主義」の基本的な理念であつた。このエッセイの末尾を「われわれは（財産所有という）一切の重荷を地面に下ろし、身軽になって歩き出さねばならない」「多くの人が脇に寄るとき、新しい人間の世界が現れる」とロレンスは結んでいる。反国家の思想である。だが私たちはもう一方で「ドストエフスキーの『大審問官』」の中でロレンスが提出している「指導者」の問題を考えねばならないと思う。

イエイツもまたその後期に属する詩「塔」（1972年6月29日発表）の中で、後に続く世代の人々に向かって、彼らが「いかなる大義にもいかなる国家にも縛られない」人間の誇りを受け継いでもらいたいという「遺言」を書いている。しかしその一方でイエイツは現実には政治の世界に進んで入つた。1922年12月6日アイルランド自由国が成立すると、同月11日、自由国の上院議員への任命を受け入れ、1928年9月に自ら辞任するまで6年間上院で活動した。彼はナショナリストとして反英の姿勢を堅持しながらもプロテスタントの進歩派として「開かれた国家」の実現に力を尽くした。そのために一方でナショナリスト過激派であるIRAに命をねらわれることもあつた。そしてもう一方で彼は貴族の保守勢力とカトリックの政権を相手に戦つたのである。1933年7月オーダッフイがファシスト党ブルーシャツを組織するとこれに関心を寄せるが、すぐに幻滅して、「教会と国家」（1934年8月に書かれる）の詩を書いた。この問題も考えてみたい。

人類学と国家観

荒木 映子

ジョイスの『ユリシーズ』を批評してエリオットは、「心理学... と民族学と『金枝篇』がほんの数年前には不可能であったことを可能にした。物語的方法の代わりにわれわれは今や神話的方法を使うことができるのだ」と述べたが、「神話的方法」の実践者としてジョイスとエリオット自身を考えているばかりではなく、この方法の必要性を最初に意識し、おぼろげに実践した最初の人物として、イェイツの名前を挙げている。ここで注目したいのは、「神話的方法」を可能にしたとされる「人類学」（こう一括できるだろう）である。神話や原始的なものへのロマン派的なあこがれは、19世紀末から20世紀初めにかけて成立した科学的な人類学との遭遇により、どのような変質を遂げたのだろうか。科学との出会いは、イェイツのケルトや民族的な素材への関心にどのような影響を与え、ロレンスの原始的心性への信念にどのような新たな展開をもたらしたのだろうか。他者としてのある人間集団を、その身体形質や文化面について研究する人類学は、歴史的にナショナリズムやコロニアリズムと無関係ではあり得なかった。原始主義の人類学的転回を考えつつ、イェイツとロレンスの国家観に話をもっていきたいと思っている。

国家観と詩の象徴、1900-1919

伊達 直之

アイルランドの独立運動が最終局面を迎えた時期に、イェイツは詩人として自己形成を行った。オリアリによってナショナリズムの政治運動に合流したイェイツは、詩の主題に祖国を見出し、芸術の審美性と政治の現実とが同じ目的に向かって重層しうる文化的な場を、文学創造の現場に定めた。イェイツのいわゆる「文化的ナショナリズム」は、即物的プロパガンダを排し、理念的な「アイルランド」のイメージを作品に提示する。それは現実行動を一時留保させ、民衆の「愛国心」に文化として共有されるべき象徴の制度を教えた上で、その象徴を通して共同の内実を備給しようとする、いわば共同体の文学制度確立をも兼ねたものとして始まる。象徴主義やオカルトの知が教えた、詩の表現が集合的な精神の次元で読者の共同体によって斉一に理解・受容されてゆく過程——いわば文学作品の授受が統一的な体験へと到る過程とその結果に対するイェイツの深い関心が反映されたものだ。

そのひとつの表れとして、初期の詩で民衆や妖精の集団の舞踏や行進のイメージに共同体の共同性への憧憬を描いたイェイツは、1900年以降、これら集合的な精神と作品の象徴との関係についての理論化を進め、それらは日本の能についての象徴による共同性の分析的考察を経て『ヴィジョン』に結実する。ここでイェイツが理論化し指定した、詩を成立させる集合的な精神とその基盤となる精神の共同体は、パーネルの失脚、国民劇場経営の挫折、第一次世界大戦、イースター蜂起など、目まぐるしく変化する現実の政治状況の中で、ナショナリスティックな愛国心が示唆する国家概念とも重なる部分を

もつ。確かに国民劇場と一連の詩劇に舞台化されたアイルランドの古代国家と、そこで個人的な誓約や契約によってダブル・バインドに緊縛される登場人物たちが象徴するのは、国家という共同体と個人の問題だ。中期詩劇において舞踏する身体のうちには、国家とも見える集会的な精神そのものが象徴されているかに思われるが、それはブレイクの神話的な国家象徴とも呼応する。独立前後のアイルランドにおいて、国家観がイェイツの詩と象徴にどのような位置を占めたのか、その諸相を確認したい。

ポスト・レッセフェール・ネットワークの中のD・H・ロレンス

武藤 浩史

20世紀に属する文学者の国家観を論じるに当たっては以下の3つの問題にまず注意することが大切であると思われる。

1. 文学者の国家観研究の意義：文学者の国家観を探ることにどのような意味があるのだろうか。対象作家に関することならば全て知るに値するといった作家中心主義を私は採らない。というか、個人作家学会の研究発表ならまだしも、シンポジウムでは、そのようなオタク的な姿勢はふさわしくない。オーデングループのホモセクシュアリティと共産主義を或る時期まで同性愛に寛容だったソビエト連邦と結びつけた村山敏勝論文（『ノリス氏の乗り換え』——ゲイ→ Kommunismus→反共スパイ）、『英語青年』2005年12月号）は、感性・文化の問題を政治と結びつける一つの模範例を示しているように思われる。イェイツやロレンスを精査して、感性・文化から政治まで論を架橋することができるかどうか。

2. 20世紀イギリス政治に特徴的な国家観：政治的右左の構図を鵜呑みにして帝国主義やファシズムを誤れる右翼として反面教師的判断基準の軸にするのではなく、国家の役割が必然的に増大する20世紀というポスト・レッセフェールの時代の文脈から考察を加えてゆかなければならない。チェンバレンに代表される関税同盟帝国主義と福祉思想の繋がり、逆に帝国主義論者ホブソンのユダヤ人陰謀理論などが示すように、右か左かという一元論よりも多角的な視点からの考察がより生産的になる。

3. ファシズムの文化研究的アプローチ：代表的なファシズム研究者 Roger Griffin は、2002年の論文（“The Primacy of Culture: The Current Growth (or Manufacture) of Consensus within Fascist Studies”）で文化研究的アプローチの大切さを力説する。わが国では、坪井秀人らの戦時日本の文化研究の隆盛も目に留まる。文化に焦点を当てることによってファシズムとイギリス右翼文化との重なりも見えてくる。この視点からすでに昨年度より日本ロレンス協会大会シンポジウムおよびワークショップが開催されているが、その姿勢をここでも尊重したい。

以上の点をふまえて、ロレンスと国家観の問題を実り豊かに論じ得る視点を見つけていきたいと思っている。

D. H. ロレンスの「イングランドよ、イングランドよ」を読む
—イングリッシュネス、地霊、散華

加藤 英治

イェイツの文学的企ての核心を「アイリッシュネスの構築」と呼ぶことが許されるなら、ロレンスの文学的企ての核心を「イングリッシュネスの構築」と呼ぶことができるかもしれない。そのような核心が露骨に現れているのが、「イングランドよ、イングランドよ」という短篇である。その露骨さは、1915年に書かれた初稿が1921年に改稿された際、イングランドやイングリッシュネスをめぐる表現が増補されたためであるが、この短篇がカルチュラル・スタディーズを専攻する大学1年生が読むにふさわしいテキストのひとつとしてイングランドで選ばれているのは、初稿における主人公の散華の描写が「圧縮され、リアリティを失った」結果、「戦争の毒」が薄められ、より安全なテキストになっているからでもあるかもしれない (Tim Middleton, “I Don’t Like England Very Much, but ...”: The Construction of Englishness in ‘England, My England,’” *Approaches to Teaching the Works of D. H. Lawrence*, ed. M. Elizabeth Sargent & Garry Watson. 井上義夫『新しき天と地—評伝 D・H・ロレンスⅡ』)。それにもかかわらず、やはり主人公の散華には、ロレンスによって思想的重量が掛けられているのではないだろうか。とすれば、主人公と詩人エドワード・トマス (1878 - 1917) を重ね合わせ、両者ともにイングランドの過去を偏愛して、イングランドの現在を無視し、イングランドの未来への絶望のゆえに、散華への道を選び、入隊に踏み切ったとし、このようなイングリッシュネスのあり方をロレンスは拒絶したのだという、あたかも散華という行為の内的な意味を軽視しているように思わせるジャーバスの議論は、とうてい私を満足させるものではない (David Gervais, *Literary Englands: Versions of “Englishness” in Modern Writing*)。主人公にとって、散華とは何であったのか。ロレンスが記した主人公の散華の心理に即して言えば、それはイングランドの現在にどうしようもない違和を感じたイングランド人のイングランドの地霊への旅なのだった。そして、それはイングランドの未来の可能性を予感させる旅でもあった。